



目次

生産現場情報：	経営の更なる安定化に向け啓翁桜の産地化と冬期農業に挑戦！ ～農事組合法人 用野目ファーム～	P 1 ～ 5
営農支援情報：	令和 6 年度 水稻生産技術対策について	P 6 ～ 9
ご 紹 介：	「石川佳純 4 7 都道府県サックスツアー i n 秋田」を由利本荘市で開催 はばたけ秋田から世界へ～秋田県産ブランド米「サキホコレ」 初輸出に向けた店頭試食販売会を開催 農業機械の「共同購入」第 3 弾 コンバイン（4 条刈 5 0 馬力クラス）の型式 決定	P 1 0 P 1 1 P 12～14
お 知 ら せ：	Z-GISを始めるなら今がチャンス！お得なキャンペーン	P 1 5

経営の更なる安定化に向け啓翁桜の産地化と冬期農業に挑戦！

～農事組合法人 用野目ファーム～

1. 法人設立の経緯

鹿角市は、奥羽山脈に連なる山地が面積の約9割を占める中山間地域です。豊富な清水や広大で土性は黒土、1年を通じた冷涼な気候により古くから米・野菜の栽培適地と言われています。

用野目ファームが位置する用野目地区は鹿角市では数少ない平地のほ場であることから、その地理的優位性を生かした水稻を基幹作物とした農業が盛んな地域です。

一方、管内農家の平均年齢が60歳代となり今後の後継者不足が懸念されたことや、ほ場が小区画なのに個々の農業者が大きな農機を所有し、集落単位で見た場合に必ずしも効率的な営農が営まれているとは言えなかったことから、平成に入り集落ぐるみでの取り組みが必要となっていました。

そこで、将来にわたって安定した営農を行うため、当地区の主要な担い手が先頭に立ち、鹿角市内ではいち早く圃場整備事業を導入した農地の大規模化を実施しました（事業期間：平成11年～平成17年）。また、平成15年に法人化したことで補助事業の有効活用と計画的な設備投資を行い、負担を最小限にした設備の拡充と生産性向上を目指しました。

令和5年度の栽培面積は74.2haで、特別栽培による淡雪こまちを直播栽培しているほか、朝獲り枝豆と啓翁桜を栽培している点が用野目ファームの特徴となっています。

設立：平成15年3月

役員：代表理事 工藤広治氏、常勤理事1名、理事2名

臨時雇用：5名

所在地：秋田県鹿角市花輪用野目17番地13



代表理事 工藤広治氏



← ハウス内で芽吹く啓翁桜

経営の概要：

水稻 42.9ha

特栽米淡雪こまち 38.9ha（直播）

あきたこまち 4ha

大豆 21.3ha（リュウホウ）

枝豆 10ha

（ふくだるま、湯上り娘、青祭、香り五葉、あきたほのか、秘伝）

作業受託 3.8ha

啓翁桜 70a



主要な施設・機械：

トラクター 3 台
 コンバイン 3 台（水稻用 2 台、汎用 1 台）
 田植機 3 台（側条 2 台、移植 1 台）
 選別機 2 台（枝豆用 1 台、大豆用 1 台）
 管理機 1 台
 ブームスプレーヤー 2 台
 乾燥調製施設（乾燥機 4 台）

2. 経営の特色

特別栽培米の淡雪こまちは、基盤整備後に J A から紹介を受けて取り組みを始めました。栽培方法は、法人化に伴い請負面積が急拡大したことから、育苗用ビニールハウスへの投資コスト削減と省力化を図るため直播栽培としました。

工藤代表は、「特栽培を直播で栽培すると決めたとき、集落内の一部農業者から不安の声もあがった。しかし、直播栽培のノウハウを早期に習得して将来の面積拡大にいち早く備えようと当時のメンバーは考えていたようだ」と語っており先見性の高さがうかがえました。

しかし、直播栽培の技術・ノウハウの習得は容易ではなかったようです。栽培当初は、栽培体系や雑草対策等ゼロから技術習得する必要があったほか、鳥害の影響も受け平均反収が 6 俵からのスタートでした。採算性を高めるために反収向上が必須だったため、J A や県地域振興局からの支援を積極的に活用し、現在の反収は約 9 俵まで向上しています。





基盤整備による新たな取組みは水稻だけではありませんでした。ブロックローテーションの一環として新たに「枝豆」に取り組みました。

当時の鹿角市内で枝豆栽培を大規模に行っている生産者がおらずゼロからのスタートであり、枝豆を担当する常勤理事の田中氏は「取り組んだ当初は、機械化もせず栽培から収穫に至るまですべてが手探りの状態だった」と語っています。

その後、試行錯誤を経て「高品質な枝豆栽培を行うには、土づくりや丁寧な収穫・選別作業が重要である」と田中理事は感じています。

土づくりは、畜産が盛んな鹿角市の特徴を生かした完熟たい肥を活用し、収穫は1畝ずつ丁寧にいき回し蒔きや傷を防いでいます。収穫時間は朝5～8時までの朝獲りを徹底し、選別作業は午前中の涼しい時間帯に終わらせています。

この取組みが高品質な枝豆栽培と収穫後における品質劣化の抑制を可能とし、市場からの高評価につながっています。

また、ふるさと納税返礼品として独自に枝豆を出品しており、多くの固定客を獲得しています。



3. 今後に向けて

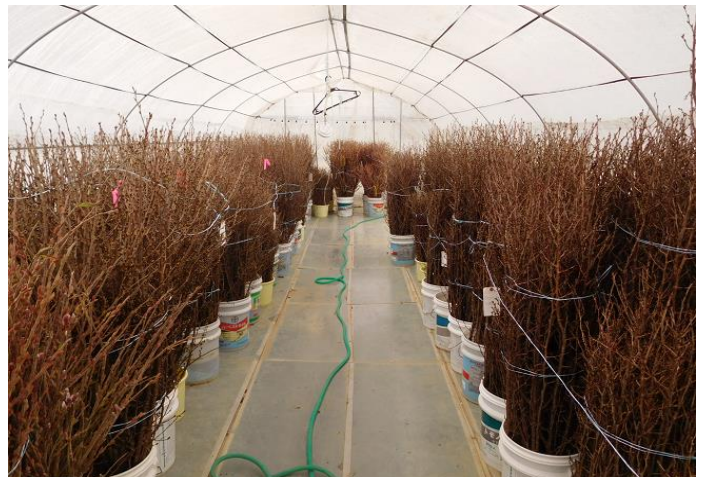
将来の経営方針について工藤代表に尋ねたところ、「地域の農地を守り次世代に繋げる農業を目指している」と話されました。

持続可能な農業を目指すためには、収支と雇用の安定化を図ることが重要なポイントとなります。用野目ファームでは冬期の収入を得るため、啓翁桜を70a栽培しています。鹿角市では平成27年から啓翁桜の産地化を進めています。管内4法人と農家7名を合わせた計11生産者の中核となっています。

また、安定した収支を確保するため、販売金額の増加とコスト低減の両立を模索しています。具体的な取組みについて伺ったところ、「特裁米の淡雪こまちや自慢の枝豆のPRに力を注ぎ、これまで味わったことがない消費者へ届けたい。また、栽培方法の見直しを継続しながらコスト削減を進めていきたい」と話されました。

資材価格高騰が続く一方で、交付金は削減され農作物の価格はなかなか上がらず、さらには担い手減少によって労働力不足が顕在化し、農業経営はこれまで以上にかけ取りが難しい局面になっています。

このような中においても、「鹿角市の中でもいち早く基盤整備事業に取り組むなど、用野目地区の農業者へ新しい技術や知見を柔軟に取り込みながら課題に立ち向かってきました。その精神は用野目ファームにも受け継がれています。地域の農地を守るため様々なことにチャレンジしていきたい」と工藤代表は前向きに語ってくれました。



農事組合法人 用野目ファームで栽培されている「淡雪こまち」とは

かづの淡雪こまちは、春先の淡雪のようにふっくらやわらかで、秋田美人のごとくしなやかで粘り強い秋田県鹿角産のお米です。

山々に囲まれ、冷涼な気候で降雪の多い鹿角の気候風土に合った特色のある品種を栽培できないかとの思いから、平成18年に試験栽培を始めました。そして、成熟期が早く倒伏に強い品種「ではひかり」と低アミロース品種「奥羽343号」の交配により新品種「淡雪こまち」が誕生し、秋田県の認定品種として平成21年より本格的に栽培を開始しました。

栽培にあたっては「直播栽培」のほか、農薬や化学肥料の使用を抑制した「特別栽培米（※）」に取り組み、環境に配慮した、より自然な米づくりを実現しています。

（※）特別栽培米～節減対象となる農薬の使用回数と化学肥料の窒素分量を、地域の通常レベルと比べ50%以下に抑えて栽培したお米です。



お米1粒のおよそ70%はでんぷんです。その中に含まれるアミロース分子が3～17%程度のお米は「低アミロース米」と呼ばれています。うるち米ともち米の中間の性質を持つ「低アミロース米」の中でも淡雪こまちは、ほど良いモチモチ感と甘さ、そして玄米であってもおいしいのが特徴です。

稲は収穫前に登熟期間があります。この登熟期間の気温が、お米のアミロースの量を左右し、適度に冷涼な気候がおいしい低アミロース米をつくります。

鹿角産淡雪こまちはおいしいのは、品種の特性と気候がぴったり合っているからです。

また、淡雪こまちには発芽が良好という特性があります。山間部でも効率的に栽培できる方法である直播栽培では、この発芽が良好であることが大きな効果を発揮します。

鹿角ではこの直播栽培により、出穂時期を遅らせることで品種の特性を最大限引き出しています。



令和 6 年度 水稻生産技術対策について

令和 4 年、令和 5 年と 2 年連続で不安定な作柄となり、特に令和 5 年度は大雨や異常高温、少雨など目まぐるしく変化する気象に十分対応することができず、収量及び品質の低下を招いたことから基本技術の確認と対応技術の課題を整理し、令和 6 年度産に向けた生産技術対策の見直しをすすめ、近年の大雨や高温などの厳しくなっている気象変化や農業情勢の変化にも対応した強い稲づくりと県産米の食味や品質の一層の向上と安定化をすすめるため、次のような技術対策を重点に営農を展開していく必要があります。

1. 気象変動リスクを軽減する総合的な土づくり

高品質・良食味米を安定的に生産するための圃場条件は、排水性の向上や土壌養分の均一化、地力の増強や深耕によって根を健全に保ち、根域を深く拡大させ、生育途中の急激な葉色の低下や生育の停滞を防ぎ、登熟後半まで根の養水分吸収能力や光合成能力を高く持続させることが重要です。

排水性を向上させるため、暗渠、補助暗渠の施工によって透水性を改善します。排水不良田では、溝切り、明渠の施工等で表面排水を図ります。

近年の耕深は、浅くなる傾向にあり、少なくとも 15 cm は確保するようにします。ただし、深耕によって下層のやせた土が混入したり、深耕に伴う適切な肥培管理を行う必要があるため、耕深は一度に行わず、年数をかけて徐々に深くします。

また、定期的に土壌診断を行い、診断結果に基づき資材の画一的な施用を見直し、必要な量の堆肥や土壌改良資材、化学肥料を施用し、土壌養分のバランスを維持していくことが重要です。

2. 適期の田植えと栽植密度の適正化

低温による初期生育の遅延を避け、出穂期の早期化による高温登熟の影響を軽減するため、田植えは、あきたこまち中苗の場合、県北（鷹巣）は 5 月 15～20 日頃、中央（秋田）と県南（横手）は 5 月 15～25 日頃を目安に行います。また、田植え時期に加え、地域にあった品種選定も重要です。

極端な早植えや遅植えは、その後の気象経過により作柄や品質に大きく影響するため、ハウス内の気温や灌水等に留意して健苗育成に努め、適期に田植えを行います。また、適正な種子予措を行うためにも、浸種水温の確保が難しい早植えを避け、計画的な作業に努めます。近年の栽植密度は低下傾向にあります。栽植密度の低下は、その後の茎数確保（穂数確保）に大きな影響を与え、作柄や品質・食味の低下も懸念されることから、品種特性を踏まえ、㎡当たり 21～22 株（70 株／坪）を基本として、1 株当たりのかき取りは 3～4 本を目安に実施します。



ガルビオフィールドマネージャーを
活用した可変施肥田植実証

3. 水管理による適正な生育量の確保

本田の水管理は、安定した作柄を確保するため重要な技術です。特に、初期生育の良否は、その後の生育量や出穂時期、収量まで影響します。このため、活着後は、温暖な日には浅水、寒い日には深水とすることで、水温や地温を高め、初期生育の確保に努めます。中干しの開始時期は、中苗のあきたこまちでは、6号1次分げつが発生した時であり、中干しは遅れずに実施し、充実した有効茎の確保を図ります。中干し期間は7～10日位とし、田面に亀裂が1～2cm入り足跡が付く程度とします。過度の中干しは根を傷め、稲体の衰弱につながる等の悪影響があるので注意します。幼穂形成期から減数分裂期頃にかけて稲は、低温に弱い時期で、この時期に日平均気温20℃以下や最低気温17℃以下の低温が予想される場合は、深水管理とします。出穂後10日間は、湛水状態にして水を切らさないようにします。また、高温が続く場合は、田面水温が高くなることから、可能な限りの掛け流しや水の入れ替えに努め、その後は、間断灌水を基本に早期の完全落水は避け、品質向上に努め、高温時やフェーン現象等の乾燥した風が強い日は、可能な限り掛け流し等の水管理を行います。

4. 生育中期の適正な施肥管理

生育中期の施肥管理は、理想生育量と比較する生育・栄養診断により適切に実施し、追肥の要否や施肥量の判断を行います。圃場間のバラツキが大きい場合は、圃場ごとに適期に生育・栄養診断を実施して対応します。㎡当たり粒数が過剰になると整粒歩合は低下し、米粒中の窒素含有率は高くなり、品質や食味が低下します。あきたこまちの目標収量を570kg/10aとした場合に必要な㎡当たり粒数は30.3～31.5千粒であり、幼穂形成期の栄養診断による追肥により、目標の㎡当たり粒数の確保に努めます。中干し以降の葉色の低下は、下層への根の伸長を減少させ収量や品質へ大きく影響します。このため、肥効調節型肥料の利用や堆肥の施用による地力の向上を図り、葉色の低下を防止します。

5. 雑草防除の徹底

近年、田植え時期に気温が平年より高くなることがあり、雑草の発生と生育は早期化する傾向にあります。除草剤散布が遅れた圃場では、高葉齢になった雑草の取りこぼし事例が見られます。また、生育後半におけるノビエ等の発生が目立つ圃場も散見されます。雑草の多発は害虫の発生にも影響します。多発した圃場は土に埋れた種子が多いと考えられます。このような圃場では、防除期間を長く確保することが必要となり、初期除草剤と一発処理の体系散布を行う必要があります。この場合、一発処理除草剤は、初期除草剤散布10日後から14日後までを目安に散布します。除草剤使用の際は、雑草の種類と量に応じた適切な除草剤を選択し適期に使用します。また、使用上の注意を守り、除草剤使用後7日間止め水とし、水質汚染を防止します。除草効果を十分発揮させるためには、畦畔補修等の漏水対策や田面の均平、圃場条件に合せた剤型の選択が望ましいです。また、水田周辺の下流など、水系環境に配慮し田植え前は、除草剤を使用しないようにします。

6. いもち病防除対策

本田におけるいもち病の発病主因は、育苗施設からの発病、感染苗の本田への持込みのほか、乾燥状態で冬を越した稲わら・粃殻です。そのため、稲わらや粃殻を育苗施設から撤去し、適正かつ効果的な種子消毒、育苗期防除を行い、持込みを最小限に食い止めることが基本的な対策です。育苗期防除は、ベンレート水和剤、ビームゾルのいずれかで行います。本田期防除を兼ねた育苗箱処理剤を使用し、葉いもち病防除を行い、穂いもち病の被害を未然に防ぐよう努めます。なお、田植え機に施薬装置を用いた防除が省力で有効です。また、出穂前後が多湿の年は穂いもち病が多くなりやすいので、穂いもち病の適期防除に努めます。

7. 斑点米カメムシ類防除対策

本県の主要加害種であるアカスジカスミカメは、水田内外の除草対策が重要です。水田内にホタルイ類等のカヤツリグサ科雑草やノビエが発生すると、本種の水田内への侵入を助長するので、雑草防除を徹底します。また、畦畔・農道の除草対策として、出穂10日後頃に行う茎葉散布剤の散布当日から7日後までに草刈りを必ず行い、本種の増殖源となるイネ科雑草の除去に努めます。薬剤散布は、水田内に出穂したホタルイ類等のカヤツリグサ科雑草やノビエが発生している圃場、斑点米カメムシ類の発生源となるイネ科植物が主体の牧草地や休耕田などに隣接した圃場、発生予察情報に基づいて多発が予想される場合は、出穂10日後頃の茎葉散布に加え、出穂24日後頃の2回目防除を必ず実施します。



収穫しながら収量を測定・Webサイトで収量分析もできるコンバインでの収穫

8. 冠水、浸水被害対策

令和5年7月中旬の大雨や令和4年8月の度重なる大雨により冠水、浸水被害が発生するなど、数年に一度から近年は毎年のように大雨被害が頻出するようになり、冠水、浸水対策を常時準備する必要があります。冠水、浸水被害を受けた稲は、被害に遭った生育時期や冠水、浸水の程度、時間、水温などの様々な条件によって、生理的かつ形態的变化を生じ、その程度によって減収を招くことがあります。水田を冠水、浸水させないための土木的対策については地域全体の施策として進めていく必要があります。被害に遭った場合は、次のことに留意します。

- 1) 特に、水害常襲地に於いて生育初期に冠浸水後、黄化萎縮病が発生した場合は、植替えます。
- 2) 生育中期以降、被害に遭った場合は、いもち病や白葉枯れ病に感染しやすいため注意します。
発生した場合は、オリゼメート粒剤3～4kg/10aを水面施用します。
- 3) 登熟期の冠水では、穂発芽が発生しやすい常襲地は、穂発芽しにくい品種を作付けを検討します。

9. 台風等による被害対策

台風は、強い風雨を伴い倒伏や風水害、進路によってはフェーン現象や潮風害の原因となります。特に倒伏すると受光態勢が著しく悪化し、登熟低下による減収と穂発芽による品質低下を招くため、倒伏した場合は、対策として次の事項について実施します。

- 1) 圃場の停滞水は、早めに排水します。
- 2) 早期に倒伏した場合は、速やかに可能な限り4株ずつ束ねて立て直し、穂が乾燥するようにします。
- 3) 登熟後期の場合は、早めに刈り取り、穂発芽した場合は、刈り分けし、品質の低下を防止します。

10. 適期の刈り取りと乾燥・調製

刈り遅れや早刈りは、胴割れや青未熟粒混入の品質の低下を防止するため適期の刈り取りに努めます。刈り取り時期は、出穂期後の日平均気温の積算値を目安としますが、日照時間が平年より少ない場合は、出穂期翌日からの積算日照時間も考慮します。なお、圃場ごとに条件が異なることから、最終的な刈り取り時期の決定は、各圃場の籾の黄化程度（黄色＋白色）を確認し、黄化程度が90%の時期で判断します。刈り取り作業は、乾燥・調製能力に合わせた作業計画を立てます。また、カントリーエレベーターやライスセンターを利用する場合は、早期に利用計画を組みます。乾燥と調整は、米を商品として仕上げる大事な作業です。作業の良否が米の品質や食味に影響するため、過乾燥を避け、籾摺り・米選を適正な処理量で行います。

（注）記載内容については、令和5年度秋田県作況ニュース（第8号）を参考に抜粋掲載しておりますので、詳しくは秋田県農林水産部発行の「作況ニュース（第8号）」をご参照願います。



「石川佳純 47 都道府県サックスツアー in 秋田」を由利本荘市で開催

J A全農は12月17日、秋田県由利本荘市で、全農所属で元卓球日本代表の石川佳純さんによる卓球教室「全農 presents 石川佳純 47 都道府県サックスツアー in 秋田」を開催しました。

このイベントは、石川佳純さんが「全国各地で、ずっと応援してくださっている皆さんへ感謝の気持ちを伝えたい。子どもたちの夢を応援したい」という思いから企画されているもので今回で14回目の開催となりました。

全農は、石川佳純さんとの触れ合いを通じて卓球少年少女の夢の実現を応援することを目指しイベントを開催しています。全農主催として開催されたのは今年12月2日開催の富山県に続き4回目です。



卓球教室の前に石川佳純さん監修の「石川佳純（かすみん）カレー」の試食会を実施しました。お米は秋田県産あきたこまちを使用し、石川佳純さん本人から来場者へ振る舞われました。

卓球教室には県内の卓球に取り組む小学生56人が参加しました。石川さんは参加者全員のフォームを観察しながら、体の動かし方や、ラケットの使い方などの確丁寧なアドバイスをしていました。

また、代表の小学生と石川さんのミニゲームが行われ、小学生が点数を入れたり、石川さんがスマッシュを決めると、会場は歓声や拍手の渦に包まれました。あこがれの石川さんと実際にラリーをした小学生は「球が速いし、プレーすべてがうまかった」「サーブを返すことができて嬉しかった」など興奮気味に感想を話してくれました。

終了後、参加者全員に石川さんから「修了証」が手渡されたほか、「石川佳純（かすみん）カレー」や「秋田県産サキホコレ」「のむりんご」などのおみやげを提供しました。

はばたけ秋田から世界へ～秋田県産ブランド米「サキホコレ」

初輸出に向けた店頭試食販売会を開催

J A全農あきたとJ A全農グループは、令和5年度から秋田県産ブランド米「サキホコレ」を本格的にシンガポールに輸出するにあたり、初輸出イベント第4弾として12月の6日間（12／15～17、12／22～24）シンガポールの日系高級スーパーで店頭試食販売会を実施しました。

今回輸出したのはJ A秋田おぼこ管内で生産された5年産サキホコレ精米378㌔。イベント期間中の12月16日、17日の2日間は、J A全農あきた職員のほか、生産者やJ A秋田おぼこの担当者、ミスあきたこまちなどの関係者が参加し、「サキホコレ」の品質や食味の良さをPRしました。試食した買い物客からは「ご飯粒が輝いていて、甘くておいしい」などの声が聞かれ、この2日間で販売予定だった約200㌔がほぼ完売しました。



J A全農グループは、今後も秋田米最上位品種「サキホコレ」をPRしながら販売経路の拡大や認知度向上を図り、世界で秋田米のファン獲得に努め、世界的なトップブランドの確立を目指します。



農業機械の「共同購入」第3弾 コンバイン（4条刈50馬力クラス）の型式決定

J A全農は、第1弾の大型トラクターの共同購入（令和3年3月末供給終了）、第2弾の中型トラクターの共同購入（令和5年3月末受注終了）に続く第3弾として、コンバイン（4条刈、50馬力クラス）の型式を決定しました。

共同購入の取り組みによって、生産者の購入価格は現行の4条刈50馬力クラスのコンバインと比較し、おおむね15～18%程度の価格引き下げ（※1）を実現しました。取扱台数は1,000台（期間：令和6年4月～令和9年9月）を計画しています。

本取り組みでは、コンバイン（4条刈50馬力クラス）の仕様について7千人を超える稲作生産者にアンケートや農業者団体（※2）と意見交換を実施しました。ここで得た生産者の声をふまえ、令和4年9月に国内農機メーカー4社に開発要求を行いました。

その後、メーカーから提案があった開発機を、令和5年11月に農業者団体の代表者とともに実機や試験データを確認・検証し、共同購入コンバインをYH448AEJU（製造元：ヤンマーアグリ株式会社）に決定しました。生産者が必要な機能を厳選し、価格をおさえながらも、機体が左右に傾いても水平に保つ車体水平制御や湿田作業でもなめらかな旋回と安定した直進ができる常時駆動方式（FDS）など、作業性に優れた機能が採用されています。



生産者の需要を取りまとめ一括発注を行うことで、メーカーが製造・流通を効率化でき、製造コストを削減できること、J Aグループが全国の生産者に結集を呼びかけ、積み上げた必要台数を背景に入札を実施することによって、生産者の購入価格の引き下げを実現しました。こうした取り組みを通じて、全農は引き続き生産者の営農を支援していきます。

※1：価格引き下げ率は地域により異なります。

※2：公益社団法人日本農業法人協会・全国農協青年組織協議会・全国農業青年クラブ連絡協議会



共同購入 第3弾

生産者&JA

共同購入コンバイン 誕生!!

全国7千名
以上の
稲作生産者の
声を反映



型式
YH448AEJU

メーカー希望小売価格
670万円(税抜)

4条刈り

51.5 馬力
(グロス)

48.4 馬力
(ネット)

主な機能

- 車体水平制御

機体が左右に傾いても水平に保つ

- 常時駆動方式(FDS)

**湿田作業でもなめらかな旋回と
安定した直進ができる**

- 自動こぎ深さ制御

●オーガ自動制御
(旋回・収納)

- 刈取オートクラッチ

- 掻きこみペダル

- 手こぎ安全装置

●オートデセル
(エンジン回転自動制御)

- 無給油で概ね1日作業
(おおよそ6時間を想定)が
おこなえる燃料タンク(43ℓ)



SIDE



BACK

JAグループからのお願い
[お問い合わせは最寄りのJAまで]

注文いただいてから納品まで4カ月程度かかります。
令和9年5月までにご注文をお願いします。

JAグループ/ 全農

JAグループは生産者の需要を取りまとめ、一括発注を行うことで、
メーカーは製造・流通の効率化をはかり、生産者へ価格メリットを還元します。

主要諸元

銘柄・型式			YH448AEJU(製造元:ヤンマーアグリ株式会社)
機 体	全長(mm)カッター付		4070
	全幅(mm)		1895
	全高(mm)		2050
	機体質量(kg)(カッター付)		2445
エンジン	型式名		4TNV86CT-MRC5
	種類		水冷4サイクル4気筒立形ディーゼルトーボ
	総排気量(L)		2,091
	出力(PS)		51.5/2600rpm(グロス)・48.4/2600rpm(ネット)
	燃料タンク容量(L)		43
走行部	クローラ	幅×接地長(mm)	450×1570
		中心距離(mm)	1035
		平均接地圧(kgf/cm2)	0.173
	変速方式		HST無段変速
	変速段数(段)		前後進無段×副変速3段
	旋回方式		FDS(フルタイム・ドライブ・システム)
	走行速度 前進(m/s)		(低速)0~0.73、(標準)0~1.40、(走行)0~2.60
	走行速度 後進(m/s)		(低速)0~0.65、(標準)0~1.18、(走行)0~2.09
刈取部	刈取条数(条)		4
	デバイダ先端間隔(刈幅)(mm)		1460~1510
	刈取装置形式		往復動刃式(シングル)
	刃幅(mm)		1450
	変速段数		車速同調+引起し2段
	刈高さ範囲(mm)		50~150
	こぎ深さ調節方式		電動モータ式
脱こく 選別部	脱こく方式		下こぎ軸流式
	こぎ胴	径×幅(mm)、回転速度(rpm)	420×810、520
	2番処理胴	径×幅(mm)、回転速度(rpm)	170×236、1600(あざやかロータ)
	揺動選別板 幅×長さ(mm)		600×1353
こく粒 処理部	脱こく処理方式		グレンタンク・オーガ排出
	タンク容量(L)		1000
	オーガ長さ(mm)		3600
排わら処理装置			マルチカッター
運転免許			大型特殊(農耕用)
オプション設定			●防塵カバー ●作業灯(こぎ口、オーガ先端) ●無線オーガリモコン ●種子キット

お知らせ

Z-GISを始めるなら今がチャンス！お得なキャンペーン

Z-GIS を新たに導入したいとお考えの皆様にお得なキャンペーンのお知らせです！

12月よりZ-GISをお得に始められる「はじめようスマート農業キャンペーン」が始まりました。3月31日までに新規入会いただいた方を対象に、通常より無料期間の延長などお得な特典をご用意しています。

①4ヵ月目まで利用料が無料

新規ご加入月から4ヵ月目まで利用料が無料になります。

例：2月15日に申し込んだ場合、5月末まで利用料が無料

②Z-GIS 初級者向け WEB 講習会開催

これからZ-GISを使い始める方向けにZ-GISの概要や基本的な操作を学べるWEB講習会を12月から3月まで毎月開催します。すでにZ-GISをお使いで基本的操作を見直したいという方も受講できます。

いまZ-GISを初めて2024年シーズンに備えましょう！

2023年の振り返り、2024年の計画づくりは農作業がひと段落した今がチャンス！

Z-GISはザルビオ®フィールドマネージャーなどのシステムとの連携も可能です。2024年シーズンが始まる前に手ごろな料金のZ-GISからスマート農業を始めてみてはいかがでしょうか。

○営農管理システム「Z-GIS」とは？

エクセルデータと圃場の位置を電子地図上で関連付けて管理する営農管理システムです。管理したい項目をエクセルで自由に追加でき、地図印刷機能も充実しています。

今ならお得なチャンス！
はじめようスマート農業キャンペーン
日々の作業を効率化しませんか？
2023年12月1日～2024年3月31日

営農情報を地図で可視化！
Z-GIS
全農 営農管理システム

入会者（新規のみ）
利用料 **4ヵ月目まで無料**
ご加入から
例：2月15日申込の場合、5月末までの利用料が無料

申込みは
Z-GISホームページ………
または専用申込書から

Z-GIS 初級者向け WEB 講習会開催
キャンペーン期間中の入会者向けZ-GISの初級WEB講習会を開催
12月19日、1月23日、2月20日、3月19日 ※すべて16:00～18:00

12月から毎月開催！メールでご案内

Z-GIS 全農 営農管理システム って…？
圃場管理ならお任せ！
管理項目別に色分け 地図表示可！

1 圃場が多すぎて管理が難しい！
2 電子化に慣れていないので、どの経路や作業内容が分かりにくい！
3 作業中も確認できる！
4 圃場ごとに色分けができるので、区画や作業内容がひと目でわかります！

【お問合せ】JA全農耕種総合対策部スマート農業推進課 TEL03-6271-8274 E: zz_zk_smart@zennoh.or.jp
JAグループ 全農

○オンライン加入申し込みはこちら

→<https://z-gis.net/99/application/index.php>

○WEB 講習会の申し込みはこちら

→<https://forms.gle/TEePofeXw9j1yinc8>

問い合わせ先：全農 耕種総合対策部スマート農業推進課
TEL:03-6271-8274
e-mail: zz_zk_smart@zennoh.or.jp

Za・あぐりふおーむ
Zennoh-akita agriculture+reform

JA全農あきた営農情報誌 **Za・あぐりふおーむ**
第48号 令和6年2月6日発行

編集・発行 JA全農あきた営農支援部営農支援課 〒011-0901秋田市寺内字大小路207の24 018-880-1011